

## ■■ 山の伝承者を訪ねて ■■

### 水窪川の奥

遠江地内を流れる天竜川から分れた水窪川の詰りは、一つは遠信国境の白倉山から出ていた。あれから北へ尾根続きに中の尾根、鶏冠山と、ずっと赤石岳に続くのである。一方南に向くと、すち榛原周知両郡に亘る大森林地帯で、黒沢、合地、黒法師、戸中、常光寺と、何れも標高5千尺程度の山が立ちならんでいる。ここを中に挟んで、大井天竜の二川が流れていたのである。その中に水窪川が西から食い入っていたので、この峪筋は、南方気多川の峪と共に、京丸、山住、奥領家をはさんで、土地も古く人も古い。多くの伝説説話を秘めていた点において問題の地域である。水窪川の奥だけでも、小さくはあるが十数の部落が、峪に沿い尾根を分けてかくれていたのである。

### 天竜大井を連絡する間道

水窪川の最も奥は、白倉川と戸中川に分かれてゆく、その一方の戸中川は、戸中山御料林から出ていた。戸中山の麓—麓というより一つの峪沿い—に、戸中という一〇戸ほどの部落がある。ちょっとした冷泉が川の岸から湧くので、水窪あたりの者がどうかするとその冷泉にはいりに来るくらいのもので、外部から入り込む者としては全くない、最も奥の行止りである。しかし参謀本部の地図を展くとそこから戸中山を分けて、黒沢山の南を越えて合地山に出て、大井川の上流寸又川の源へ出る間道がある。しかしこの道は、土地の者にももう判らない、附近の獵師が二、三人知っているだけで通行の人とてはない。夏分たまたま大井川から天竜峪へ越すヒヨウ（川狩人夫）が、通るくらいのものである。この仲間は不思議に道を知っていた。いかに健脚の者でも、途中山中に一夜を明かさねばならぬのだから、容易ではなかった。しかしながら大井川上流から、仮に水窪地方に出るとすると、ずっと南方気多川峪に出る道を選ぶとしても、なお三倍以上の工程になるから、地理に詳しい者はこの道を選ぶのは当然で、一面重要な交通路である。この間道を逆に水窪から入ってゆくと、戸中の部落を出離れて、さらに二〇町ほど峪に沿うて進んだ処に、なんぼん難場道というところがある。

### 難場道の一つ家

戸中の部落で人家は全く絶えているが、実はこの難場道に、昔からたった一軒屋敷があっ

て、難場道の一つ家として有名で、以前この間通行の者は、この家が唯一の足場であり目標であった。この一つ家を離れてからは、寸又川の源の東側まで、十余里の間全く人煙はない。道は森林の中を峪に沿い尾根を分けて進むので、人家がないと同様に、これより奥には、深山幽谷としての興味以外には、何ら求むるものはなかった。しかもこの難場道から一里余山中に分け入ったところに、長者屋敷の跡というのがあり、そこを中心として、経塚、宝篋印塔を初め、墓石らしいものが今も残っている。それをめぐる各種の伝説が、この一つ家を中心に語り継がれていた。長者屋敷は一に伊東長者の跡ともいい、ここ三〇年前までは、山中に礎石が幾つか埋もれていたのを見た者もある。昔（足利時代）覚伝（一に角伝）という山伏が、一族五二人を引具して、尾張の津島からここに落ちて来て隠れたと伝え、後その子孫が次第に山を降って、戸中から山一つ越えた下田に落ちついた。今ある高橋という屋敷がそれであるという。あるいは覚伝が伊豆の高橋某を養子として後事を托し、その身は帰国したので、今ある高橋家はその後裔という。家には錦の古片を幾つか蔵していて、先祖の由緒を語る狩衣の一片であるという。そうして方二寸四方ほどの美事な布を、幾枚も紙に包んで持っていた。中にはかつて尊貴の御料というものもあった。その他瀬戸芋の子の茶入、京焼の茶碗、壺等も伝え、代々桔梗の紋を用いていた。氏神は字根の地内にある牛頭天王といい、これを一に覚伝札者明神ともいい、別に牛頭天王由来記なる一巻を伝えている。

近年長者屋敷付近に埋もれていた古碑の文字から、ある尊貴の陵墓にあらずやと説をなす者があり、静岡県庁から、調査の役人が駕籠に乗って登ったりした。その前には役場の書記が一週間分の食料を用意して、山々を隈なく調査したが、ついに巷説を実証する何物も獲られなかったそうである。

### 一つ家の翁

尊貴の陵墓説は、実は何ら根拠とすべき史実があるわけではないらしいが、ある種の信仰団が一時根拠の地としたことは事実と思われる。それが久しい年月の間に、さまざまな形に語り伝えられたために、問題の種ともなったが、その根拠は、実は難場道の一つ家であった。そうして現在この長者屋敷に絡まる伝説を伝えていたものは、この屋敷の当主坂下初蔵さんの父であった。この人を措いてもう他にはないというので、一度訪ねて一通り聴いておきたいとは、水窪を中心にして心ある人々の願望であるが、まだその機会がないという。年は八〇を三つ四つ出たが、未だ記憶も確かであり、平素は土間に座って、黙々として草履を作るのが日課であるという。

私がここを訪ねたのは昭和二年の五月であった。もちろん先を急ぐ旅のことで、ゆっくり話を聴こうとまでは思わなかった。ただそうした老人の話を訊ねてみるだけでも、何らかの意義があると思ったのである。それで水窪の宿を未明に発って、四里の山道を難場道の手前まで辿り着いて、おりから行き遇うた村人に老人のことを訊ねると、相憎その日から焼畑に出て、当分家には帰らぬとの話である。それを聞いた時は、せつかく意気込んだ鼻を無惨に砕かれたように感じたが、それでも焼畑作業にでるほどの老人の元気を、影ながら心強くも頼もしくも思うた。附近に泊まるべき宿もないので、万事を諦めて踵を返すより他なかった。あるいは遇って見たら、案外の感を抱かせられたかも知れぬが、山深い一つ家に、昔を語る唯一の老翁が、たっしやで生きていることは、一個の宝篋ほうきょう 印塔などとは、比較にならぬ心強いものがある、あれからもう三年になるが、今も健在であるかどうか。何かのたびに焼畑のワチを繕う老人の、白髪しろかみの姿が目めに浮かぶ心地がする。

### 嶺に立った屋敷

難場道から引き返して、戸中の部落から西北へ、胸を衝くような急坂を、七、八町登ったところが、根という部落である。山のそぎ立ったような斜面に、ぼつりぼつり屋敷が立っていて、隣へ行くにも、幾つかの屈曲した坂を経ねばならぬ。現今は根という文字をあてているが、本来嶺と書くべきであることは、一目にわかるほど、高い山の嶺に展けた村で、畑という畑は、三尺おきくらいに頑丈な横木を渡して、これが土止めであると同時に足場ともなったのである。ここの最も高い屋敷をホツと言うたが、その屋敷の一段下に、わでという屋敷がありその家にまた一人、珍しく記憶のよい伝承者型の人物がいる。名前は金沢鶴蔵といって、年配は六〇前後である。いかにも実直らしい挙措で、縁側に腰かけながら、狩の話、山姥の話、山男、大人と、遥かに前方に展開した山々を指しながら話は尽きなかった。一三、四の子供が一人、仕事の手を休めて、脇に腰かけてときおり口を挿むのが、一つでも多く、物語を聞かせようとの心遣いらしく嬉しかった。

### はやなり竜平

三河と信濃の国境に、川宇連と言う村がある。土地の人は「かおれ」と発音している。現今では信三を連絡する立派な街道が出来て、夏分は乗合自動車も通うほどであるが、ここ、三、四〇年前は、話の外の僻村であった。今でも老人が口惜しがって話すことだが、何一つ金を得る途がない。炭が売れるという話を聞いて、山に木はいくらでもあることであり、五百六百の炭俵をたちまち積み上げたが、さっぱり誰も買ってはくれぬ、仕方がな

いので、三里の山道を背負って、津具へ出して二足三文に叩き売ったが、大部分は山へ積んだまま捨ててしまった。こんな土地だから、男は多く獵を渡世にした。猪鹿を撃つても後の獲物の始末に弱ってしまう。撃つことは渡世だから、幾らでも撃つが、後の始末がつかぬ、それでも持って生まれた性分で、見ては逃がしてはおけなかった。こんな土地に、「はやなり」と渾名をとった獵師のいたことに不思議はない。界限に響いた獵師で、遠く近江から若狭までも鹿を撃ちに歩いたほどの男だから、名人とも言われたのだろうが、「はやなり」と名を得た理由は、一発放して次の矢をつがう手際が尋常でなかった。もう八九になるはずだが、まだまだ意気は衰えぬとの話を聞いて、去年の暮れも迫った頃に、目的の用事も一段落ちついたので、この今日を措いては、他に機会は得られぬと、実は三里の道を夜をかけてその家へ訪ねて往った。娘が街道傍で宿屋をしていて、老人は別に隠居しているとのことで、もう寝てしまったと言うたが、それでも寒い中をやって来てくれた。何でも話がしたくて堪らぬのだが、誰も相手にせぬので老人弱っているとのことであった。会う前は、山のある限りの話が尽きぬだろうとひそかに期待していたが、遇って見る

と案外なことに、山の神を祭る作法もろくろく弁<sup>わきま</sup>えてはいなかった。白髯を胸まで垂れて、赤ら顔の文字通り老獵師らしい風貌の持ち主であるが、口を衝いて出る物語はことごとく自分の最初の期待を裏切った。もちろんもう床へ入ったものを起して、さあ話をしろなどと言ったとて、出てくるわけのものでない。ただ私の心持ちとしては、その語りぶりなり、態度から何者かを得ようとしたのであるが事實はすべて期待に反して、いくらでも次々に語って聞かせるが、それがことごとく通り一遍のいわゆる昔語りであった。何かの機会にその鋒先をやっとそらして、獵の話に持って行くと、これはまた案外に無口になってしまった。ぽつりぽつりと話し出す獵の話から、だいたい老人の性格も想像することが出来た。総じて名のあるほどの獵師なら、獵の式作法くらいは当然心得ていると信じたのはこっちの誤りであった。この経験は獵師を訪ねてたびたび嘗めさせられたことだが、狩人として精も魂も打ち込んで来た者には、山の神の存在も、山の不思議もあるわけはなかった。七〇年間、山また山を渡り歩いたが、第一不思議というほどのことに、一回だって遭遇したことはない。山はそんなことのあるべき場処でないと、これは老人が永い獵生活から得た信念であった。

でもたった一回、不思議と言え言えぬことはないとして語ったのは、まだ若い頃、津具の禿太郎の山へ友達二人と入り込んだ時、秋の初めで時刻は朝の八時頃でもあったろう、何気なく足下を見ると、草叢の中に蝮が一匹ふっと頭を上げてこっちを見ている。うるさ

いと思って、脇へ進もうとふと別の場所を見ると、そこにも同じようにいる。それから身の廻りを見廻すと、行こうと思う先々に、ことごとく蝮が頭を上げている。友達と顔を見合わせて笑って、仕方なく引き返して、その日は休んでしまったが、これだけは不思議なことで、今に眼に残っているといった。胸中みじんの曇りのないこの種の獵師にも、こうした思い出が一つでもあることの方が、自分には何かしら不思議である。